



新宿を歩いていたら、急に万歳、万歳の叫び声がビルの上から響いてきた。それですぐに野球で世界一になったと知れた。喜ばしいことだ。が、よく考えてみると、若い人がキャキャと集まっていて、いまだに「万歳」と言うしかないというのがちょっと、過去の亡霊がさまよっているのに、気がつかないノーテンキな底の浅さが感じられてちょっとさ寒い気がする。まあ、こっちもどこか飲めるところはないかと、そのままガードをくぐって、しょんべん横丁へ直行したのだから、人のことを言える立場にないことは重々承知している。

今、しょんべん横丁と書いたが、たしか「思い出横丁」とかなんとか歯の浮くような看板が立っていたと思ったが、あれ

は昔から、きっぱりとしょんべん横丁でないと通用しないのだ。と、路地側のガラスの冷たさを背中に感じながら博士とビールを一本とって、あとは冷酒をコップですすりながらうだうだと話す。

今日の博士はまだバンクラから帰ったばかりだから鼻息が荒い。それもどうも順調とばかり言われてられなそうな雲行きで、その反動か「あれでもドクターか！基礎から教えなおさなければならん！！」などと元気がいい。まあ、それもいいのだが、大切なのは現場でどこまで言えるかだ。私なんぞは現場に出ると大したことが言えないから、メコンウイスキーをもらった手前大きい声では言えないが、大して役にはたたと了解しているので、「今度は一緒に行って、きっちり教えてこよう。」などと元気良く言われても、まあ、無駄になりそうなことに高い金を使わせては申し訳ないという声のトーンも落ちてくる。

一人の人間が何でもできるわけではないのだが、最近やっとそんな簡単なことに気がついてきて、いろいろな能力や魅力を持った人が、うまくかみ合って、やっと期待どおりの力を発揮できるものだと実感できるようになってきた。まあ、当たり前なことなのだが、熱中してやっているとそのことさえ見えないものだ。ということで今気をつけているのは、できるからやってしまうのではなく、ちょっと立ち止まって、自分がやっちゃって本当にいいのか見直してみることです。

そんなことを考えていたら友人からメールが入った「紹興の町をうろつきまわって古い居酒屋の台所でつまみをつくってもらって甕出し紹興酒をのんできた。ついては、花見用の紹興酒を持参しようと思います。」ということで、彼が来たら泡盛の古酒を開けようと思っていたが、紹興酒に先を越されそうだ。どうも近いうちに夜桜の下をさまようことにもなりそうだ。なかなか自分を見つめなおしてみることはできそうにないな。ああそうだ、その前に来月からオースに行ってしまう人と夜飲む約束をしていた。そんなことより、年度末で今日も徹夜だ。それこそ一人で何でもできるわけではないのだが、ついできると信じてドンキホーテのように風車に突撃していつしてしまうので、今のうちに大量の作業とぶつかってからとまどってしまう。しかし今まで終わらなかった仕事はなかったのだ。しかし、しかしだ。再度書くが、できるからやってしまうのではなく、請けた仕事を最後までできてしまうからやってしまうのではなく、もっと正しい道があるような気がする。たとえば、できてやらない道もこれから考えてみなければ。考えてみたら私がいつもみんなに言っていた言葉なのだ。「デザインとはものを作るだけでなく、作らないこともデザインだ。そして将来に託すことだってデザインだし、今の考えが一番いいとはかぎらない。無理してもものを作ってはいけない。」今月は今一度いつも言っている言葉を考えながら酒を飲もう。春の酒というのはそういった飲み方に向いているのかもしれない。しかし、男たちはどんな思いで酒を携えてやってくるのだろうか。